

(一社) 東洋音楽学会 西日本支部だより

Newsletter of the West Japan Chapter, Society for Research in Asiatic Music

第83号 (2016年7月31日)

定例研究会のご案内

次回第 274 回定例研究会の日時や内容等は未定です。決まりましたらあらためてご案内を差し上げます。

* * * * *

定例研究会の記録

東洋音楽学会西日本支部 第 271 回定例研究会

日 時：2016年3月12日(土) 13:30～15:30

場 所：中京大学名古屋キャンパス センタービル 7階 0703 教室

主 催：中京大学 文化科学研究所

例会担当：明木 茂夫 (中京大学)

《講演》

新美南吉先生と音楽 —安城高等女学校第19回生への聞き取りから—
加藤 希央 (ピアニスト・音楽研究)

〈要旨と報告〉

『ごんぎつね』や『うた時計』で知られる新美南吉（1913-1943）は西洋音楽を好んだ。本講演は彼が奉職した安城高等女学校（安城高女）における女学生たちの音楽環境を、彼の日記と受け持った第19回生（1938年4月入学、1942年3月卒業）への聴き取り調査に基づいて明らかにする試みである。

まず女学校の概略説明があり、次いで安城高女の先進的な音楽教育が紹介された。学校には立派なグランドピアノとオルガンが設置され、音楽科教員の太田あき先生の指導でオルガンを学ぶ授業も行われていたらしい。張り詰めた雰囲気で行われた独唱の試験の様子や、《旅愁》や《四つ葉のクローバー》といった外国の民謡を筆写して歌った様子も解説された。

転任によって1941年4月から音楽科の教員はピアノに堪能な寺村光代先生になり、教室にはショパンが流れるようになった。寺村先生は地域のピアニストとしても活躍していて、安城第四国民学校（現在の安城東部小学校）で行われたピアノ開き演奏会の様子が南吉の日記を通じて紹介された。なお、安城高女で当時使用されていたベッカー社のグランドピアノ（ロシア製）は、現在、安城市歴史博物館に設置されている。この楽器を使用した講師のピアノ演奏（《ウォーターローの戦い》）を映像で鑑賞した。また、学校は音楽教育に積極的で、荻野綾子のリサイタルや全校生徒を対象にしたレコード観賞会も行われたらしい。

次に取り上げられたのは、昭和17年3月に行われた予餞会における合唱である。戦時体制が強まっていく中で《アロハ・オエ》が取り上げられたことが言及され、結核で緩慢な死を迎えつつある南吉の様子と重ね合わせながら、ごく普通に敵国の歌が歌われた状況が描き出された。

講演の後、当時演奏されたショパン《スケルツォ第2番変ロ短調作品31》や、オルガンがある程度弾けるようになった生徒に対するピアノのレッスン、戦争末期の蓄音機の供出に関する補足説明があった。質疑応答も行われ、歴史的なピアノと現在一般に使用されているピアノとの音の違いに関する質問に際して、歴史を担った楽器を弾く場合にはその

まま現代奏法で処理するのではなく、歴史を踏まえ、音を考え、過去のリズムを考慮して演奏するという方針が示された。

講演は終始和やかに進行した。演奏と研究とがバランスよく組み合わせられ、またそれ以上に郷土を見つめる温かいまなざしに満ちた講演であった。近代日本の音楽文化は中央と地方という枠組みで議論されることが多いが、女学生たちが共有した音楽環境の掘り起しは、地方都市における音楽文化を一括して議論することに対する問題提起にもなるだろう。聴衆にはまさに当事者だった安城高女第19回生の講師の祖母をはじめ、戦争を体験した世代の人々も少なからず見受けられた。学術研究に加えて地域文化活動としても有意義な催しだった。

(上野 正章 記)

* * * * *

東洋音楽学会西日本支部 第272回定例研究会

(※日本音楽学会西日本支部第31回例会と合同開催)

日 時：2016年5月28日(土)

場 所：大阪音楽大学 F-215 教室

例会担当：井口 淳子(日本音楽学会)

福岡 正太(東洋音楽学会)

《修士論文発表》

ポザウネンコアの民族誌—共属感情の経験としての音

秋山良都(大阪大学)

〈要旨〉

ポザウネンコア(Posaunenchor)は、ドイツの福音主義教会に見られる金管合奏である。19世紀前半の信仰覚醒運動での信徒活動に始まり、ヨハネス・クーロー(1851~1941)らの影響で現在のドイツ全域に結成さ

れた。現在、ドイツに約7,000団体、約105,000人の活動が見られる。トランペットとトロンボーンを中心とした金管楽器のみによる四声部の編成を基本とし、讃美歌を中心的なレパートリーとする。讃美歌の伴奏等、礼拝の音楽演奏が公式な活動となっている。ポザウネンコアのような民衆的管楽合奏・ブラスバンドの音楽実践について近年研究が進展している。特に、最近の民族誌的研究は、管楽合奏が共同体の音楽実践として、共同体形成のための社会的相互行為として機能している事例を提示している(Finnegan 2002, Dubois et al 2012, Brucher 2013)。発表者はこれらの先行研究を参照し、2014年4月～2015年3月、ゲッティンゲンのポザウネンコアに対してフィールドワークを行った。フィールドワークでは、ポザウネンコアのメンバーとして音楽実践に参加し、音楽に関するイベントのみならず、メンバーの生活の様々な場面に立ち会った。

ポザウネンコアは、福音主義教会とその信仰に関わる教会共同体の音楽実践だが、メンバーは、特定の信仰共同体あるいは血縁的、地縁的共同体を活動の前提としていない。メンバーの社会的背景は様々であり、多くは戸籍上福音主義教会の信徒であるが、必ずしも宗教的行為を目的としてポザウネンコアに集まっているわけではない。しかし、メンバーはポザウネンコアで「家族」形容しうるような親密な社会関係を築いている。この共同体形成には、「参与型パフォーマンス」(Turino 2008)としての合奏が重要な機能を果たしている。つまり、ポザウネンコアの合奏では技術的・美的達成よりも、社交として音楽実践がなされることに価値が置かれているのである。メンバーは、共同的な合奏における〈一体となった音響(Gesamtklang)〉への没入つまり音楽的相互行為=社会的相互行為を通して、〈ゲマインシャフト(Gemeinschaft)〉の感情すなわち共属感情を経験する。民族誌的描写としての本修士論文で提示したのは、ポザウネンコアのメンバーが、毎週の練習(Probe)、礼拝、教会での演奏会、待降節・降誕節の演奏などのイベントの中でこうした音(Klang)を経験する過程である。

本発表に対する質問を踏まえ、今後の研究課題を提示したい。ポザウネンコアは、19世紀以前に教会音楽の演奏を担っていた職能組合的都

市楽士(Stadtpeifer)との直接的連続性はない。19世紀ヨーロッパで生じた文化的・社会的変革の過程でのポザウネンコアが音楽的・宗教的運動としての発生と展開について歴史的考察が必要である。また、事例の描写に焦点をあてた本論文では、「音響への没入」に関する分析的考察が不十分であった。社会的相互行為としての音楽実践における音響・身体・感情の現象についての分析を今後の課題としたい。そして、現在のヨーロッパの宗教的状况でのポザウネンコアの「共属感情」の意味について、引き続きフィールドワークを中心とした調査を進めたいと考えている。

(秋山 良都 記)

〈報告〉

発表者の秋山氏は、ドイツの福音主義教会の礼拝での演奏を中心に活動する、「ポザウネンコア」と呼ばれる金管合奏について、中部ドイツの古都ゲッティンゲンを舞台に調査・研究を進めてきた。作品や演奏など達成された音楽をおもな対象にする従来の西洋音楽研究に対し、音楽実践に注目することで、しかも多くの事例を浅くではなく一都市の事例に集中して参与観察をおこなうことで、これまでの金管合奏・ブラスバンド研究にない新たな視点を提示する試みである。なお、「ポザウネ」といってもトロンボーンだけでなく各種金管楽器を含み、ふつう楽器ごとにパートが分かれる他の金管合奏と違って、讃美歌合唱に対応するようSATBの四声体に分かれるところが「コア」と呼ばれるゆえんだという。

ポザウネンコアの歴史とゲッティンゲン・ポザウネンコアのメンバー構成の調査、加えてフォーマルなインタビューと、みずからポザウネンコアの一員になってのインフォーマルな会話を通じて、音楽実践の中でメンバーがとくに重視する要素が何かがあぶり出されてくる過程はたいへん刺激的で、興味深かった。一方で、「一体となった音響の中に身を置くことによる音楽的な一体感」を最大の目的とするいわゆる「参与型パフォーマンス」(Thomas Turino: Music as Social Life 2008)がここで実践されているという結論には、もう少し奥行きが欲しいところ

である。質疑応答の最後に、「共属感情」にもとづく活動への「没入」という言葉が具体的にどのような状態を表すのかという質問が出たのは、そのためだろう。発表者の紹介したインタビューの結果からは、ポザウネンコアのメンバーにとって大切なのは「共に演奏することによる共属感情」という答しか出ていないが、「没入」の中身にはふつう音楽的な満足も含まれるのではないか。演奏会での高度な演奏に目標を置く団体の場合、たしかに共属感情を犠牲にしてでも個々のメンバーに高い要求を出すことがあるが、それでも最初から共属感情をないがしろにしたのでは、アマチュアの演奏団体としては成り立ち得ない。そのさじ加減については、メンバー間に温度差があっても不思議はないのだが、ゲッティンゲンの団体での調査結果にはそれが見られなかったようだ。

となれば、他都市のポザウネンコア、カトリック地域の金管合奏、教会とは無縁のアマチュア音楽演奏など、比較の相手となる他の音楽集団の事例を参照しない限り、見えてこない点が多々あるように思う。秋山氏自身、一都市での「徹底的な事例研究」と併せて、歴史的・地理的に拡がりのある調査を今後の課題として挙げていた。参与観察とのバランスをうまく取りながら、新たな調査をさらに実りある研究へと結びつけて欲しい。

(阪井 葉子 記)

《博士論文発表》

アントニオ・ソレールの鍵盤ソナタにおけるフィギュレーション
宮内晴加 (関西学院大学)

〈要旨〉

本発表は2015年度提出の博士論文より、第3章「ソレールの鍵盤ソナタに見られるフィギュレーション」と第4章「ソレールの音楽の独自性とその歴史的 position」の内容を紹介したものである。

スペイン人作曲家アントニオ・ソレール (Antonio Soler, 1729-1783) の144曲に及ぶ鍵盤ソナタの先行研究は、様式分析に重点が置かれ、表

現の有様については深く研究されてこなかった。そのため彼の音楽を纏うフィギュレーションに着目し、その一端の解明を試みたのが本論文である。

まずソレールのソナタの基本情報とフィギュレーションの定義を示した後、単一楽章のソナタ内に見られる特徴的なフィギュレーションを取り上げ、それらを①同一音を1指が保持するフィギュレーション、②鋸歯状の進行、③刺繍音の入ったフィギュレーション、④オクターヴ分散、⑤分散和音、⑥左右の手での分散、⑦音階進行、⑧同音反復の8種類にグルーピングし、その詳細を整理した。

次にそれらとソナタの形式との関係を検討し、フィギュレーションの点からソナタの分類を試みた。分類項目はA大部分がフィギュレーションで構成されているソナタ、Bフィギュレーションの部分とフィギュレーションがない部分があるソナタ、Cフィギュレーションがほとんど見られないソナタ、例外の4種である。Aはさらに3種、BとCは2種に分類できるのだが、94曲中A48曲、B21曲、C20曲、例外5曲となった。Aのソナタが50%に及ぶことから、フィギュレーションがソレールのソナタの重要な表現形態であることが確認された。さらにソナタ全体におけるフィギュレーションの扱われ方として、フィギュレーション部分の音価の統一、主題のフィギュレーションの左右両手における使用、休止や停止の間を縫うフィギュレーション使い、ソナタの後半部分での再利用、転調部分での一貫した使用などが挙げられた。

このようなソレールのソナタにおけるフィギュレーションとドメニコ・スカルラッティ (Domenico Scarlatti, 1685-1757)、セバスティアン・アルベロ (Sebastian Albero, 1722-1756) のフィギュレーションを比較した場合、スカルラッティとソレールはフィギュレーションで構成されるソナタの割合が最も多かったのに対し、アルベロは最も低かった。他の音楽的共通点や相違点も考慮に入れると、ソレールのソナタの大部分はスカルラッティとの音楽的共通点を残すソナタであるといえよう。ソレールはスタイル変化の時代の中にありながら、前時代のスカルラッティを模範とし、その作風を踏襲し、前古典派の音楽的潮流に

近づいたアルベロら同時代の音楽家たちとは異なった独自の道を歩んだ作曲家として、スペイン鍵盤音楽の歴史に位置づけられる。

(宮内 晴加 記)

〈報告〉

宮内氏の発表は、博士論文「アントニオ・ソレールの鍵盤ソナタにおけるフィギュレーション」の内容について、特にその中心部分をなす第3章と第4章に基づいたものである。すなわち、生粋のスペインの作曲家で、聖職者でもあったアントニオ・ソレールが1740年代から没年(1783年)までの間に作曲した単一楽章の鍵盤ソナタ94曲を分析することによって、その特徴を明らかにし、さらにドメニコ・スカルラッティやセバスティアン・アルベロらのソナタ作品との比較から、ソレールの歴史的位置について考察したものである。

本発表の独創性は、ラルフ・カークパトリックがスカルラッティのソナタ研究で用いた形式の枠組みを用いながら、フィギュレーションを楽曲分析の中心に据えた点にある。発表者は、まずフィギュレーションの定義を行った上で、ソレールのフィギュレーションにはその特徴から8つのパターンがあることを示した。そして、それぞれの楽曲におけるフィギュレーションの構成を詳細に分析し、フィギュレーションの使用法によって全曲を分類した。その結果、「大部分がフィギュレーションで構成されているソナタ」に分類されるものが全体の約半数あり、「フィギュレーションが部分的に使われているソナタ」も含めると全体の7割以上にのぼることがわかり、フィギュレーションそのものがソレールの華やかな難度の高いソナタの原動力となっていることが示された。

これをもとに発表者は、同様の手法で分析したスカルラッティやアルベロのソナタと比較し、ソレールのソナタは彼自身が尊敬していたスカルラッティとの共通点が多く、古典派への過渡期の時代にありながらも、彼がアルベロのように前古典派的な作風を取り入れることはなかったと結論付けた。

宮内氏のフィギュレーションを中心にした分析は、先行研究に欠けていた視点を補い、それによりソレールのソナタの歴史的な位置づけを明確

にした点で意義があるだろう。

出席者からの質問として、フラメンコ音楽、とりわけギターやカスタネットのリズムとの関連性、またソレールのソナタのハーモニーや転調の特徴についての質問が出された。スペインの民俗音楽からの影響については発表者も関心を寄せているところであり、またソレールの転調には独自の特徴があることが示唆された。だがこれらの事柄をさらに理解するためには、より幅広い視点からのアプローチが必要となり、今後のさらなる展開に期待したい。

(芝池 昌美 記)

《小泉文夫音楽賞受賞記念講演》 司会 中川真

On the cusp of music and dance: body percussion as a trans-cultural phenomenon and expression of identity and social change in Aceh, Sumatra

Margaret Kartomi (モナシュ大学)

〈要旨と報告〉

はじめに司会の中川真氏より、カルトミ教授の経歴と主要業績について紹介があった。カルトミ教授はインドネシア特にスマトラ島の音楽文化の研究で知られ、1990年には独自の分類法による楽器学の著作を出版され、2013年にはインドネシア・スマトラ島10州のうちの6州に関する音楽文化を取り上げた本を出版された。

発表では、スマトラ島アチェのボディー・パーカッションに関する考察がなされた。男女別々のグループによって演じられ、演者の姿勢も座し、跪き、立って歩くなどの多様な形態がある。自分の身体を叩く場合も隣り合った相手の身体を叩く場合もある。アチェでは結婚式や割礼などの際に2-3グループが競演を行う形も見られる。19世紀終わりの古い写真から現在の状況に至るまで、特にスダティ sedati と呼ばれるダンスを例に、衣装や演者のフォーメーションなどを含む様々な特徴が紹介された。8人の男性または女性が多様なフォーメーションを生み出し、

速度の速く規律の整った演技を披露する。スダティにおいては36種類の音が見られ、これらを独自の記譜法で記す工夫も紹介された。アチェでは人口の99パーセントがイスラーム教徒であり特に2003年以降進みつつあるイスラーム意識の高まりの影響から、衣装などの面でイスラーム的要素が強調されている。また海側のアチェに対して山間部に住むガヨの人々のサマン saman と呼ばれるダンスも紹介され、言語の違いやイスラーム化の度合いなど両者の文化的な違いについて、歌詞や衣装やリズム・パターンなど上演スタイルの違いについて考察された。さらに近隣のマレーシア、中東やアフリカなどのボディー・パーカッションの事例に触れながら、これらの中でもアチェのものは最も複雑なパターンを持つことが述べられた。現在の様々な創作活動についても触れ、津波や紛争後の伝統芸術の復興を目指す活動についても紹介された。結論として、ボディー・パーカッションはイスラーム起源であると推測されること、また世界でも独特の完成度の高い芸術であることが述べられた。

質疑応答では(ガヨの)サマンのユネスコ危機遺産としての登録の影響とその背景について、観光文化への影響や、周辺のアチェとの文化をめぐるせめぎ合いの状況が述べられた。またアチェのボディー・パーカッションの伝統についてはその起源などが明白ではないとの見解が述べられた。またイスラームにおいて楽器演奏が忌避されることとボディー・パーカッションとの関連について、すべての面でイスラーム的芸術とは言えない部分もあり、今後も慎重に考察したいとの見解が述べられた。上演における即興や創作の余地については、実際の上演では複数演者の統制と規律が必要なため即興は行わないが、作曲段階では多くの創作がなされることが提示された。

最後に今後の活動として、モナシュ大学楽器資料館の活動と、オーストラリアにおける研究機関や博物館の連携事業について、工学や医学の技術を用いた楽器の構造分析法の開発について、スマトラ島の未調査の4州に関する同行された長女のカレン博士や他の研究者との共同研究について、ユース・オーケストラの活動についてなどが述べられた。

(福岡 まどか 記)

* * * * *

■入会申し込み・住所変更について

(一社) 東洋音楽学会への入会をご希望の方は、82円切手を同封し、下記の学会事務所へ入会案内・申込用紙をご請求ください。申込用紙は、ホームページからもダウンロードできます。会員の異動や住所変更等についても、下記の学会事務所へお知らせください。申し出先は支部事務局ではありませんのでご注意ください!

一般社団法人 東洋音楽学会 学会事務所
〒110-0005 東京都台東区上野3-6-3 三春ビル307号室
TEL 03-3832-5152, FAX 03-3832-5152
ホームページ <http://tog.a.la9.jp/>

■研究発表の募集

西日本支部定例研究会での研究発表を希望される方は、発表種別（研究発表・報告等）、発表題目、要旨（800字以内）、氏名、所属機関、連絡先（住所、電話、FAX、E-mail）を明記の上、下記の西日本支部事務局までお申し込みください。

東洋音楽学会 西日本支部事務局
〒565-8511 吹田市万博記念公園10-1
国立民族学博物館 福岡研究室気付
TEL 06-6878-8351, E-mail fukuoka@idc.minpaku.ac.jp

支部だより 第83号

発行：東洋音楽学会 西日本支部 担当：上野 暁子、出口 実紀
〒565-8511 吹田市万博記念公園10-1
国立民族学博物館 福岡研究室気付
TEL 06-6878-8351, E-mail fukuoka@idc.minpaku.ac.jp